

《主張》における迂言的二重否定にみられる配慮表現の研究

——「といっても過言ではない」を中心に——

大堀 裕美（創価大学大学院生）

要 旨

話者が《主張》を行う際に、迂言的二重否定によって話者自身の《主張》を緩和する場合がある。本稿は Brown & Levinson (1987) の消極的ポライトネスの観点から、その発話の配慮表現的考察を行うものである。話者がわざわざこのような迂言的二重否定表現を使用するのは、その主張命題に特徴があることがわかった。迂言的二重否定表現の《主張》は、一旦は別の見解や立場に配慮し、受け入れるかのような姿勢を示す一方、それとは異なる話者自身の《主張》を行う際に出現する、一種のモダリティ的手法である。話者の《主張》の立場がどちらなのか、聴者が話者の発話意図を受け取るのに時間がかかることから、明らかに二重否定だとわかる表現より巧妙である。

キーワード：迂言的二重否定、主張命題、配慮表現

1. 研究目的

本稿は、話者が《主張》を行う際に、迂言的二重否定によって《主張》を緩和していると思われる発話の研究である。筆者のこれまでの用例検証から、話者がわざわざこのような迂言的二重否定表現を使用するのは、その《主張》命題が強烈であったり、断定的であったりする場合に多くみられることがわかった。山岡ほか (2010) には、二重否定は「『Pである』と言うべきところを、何かしらの婉曲性をもって緩和しようとした配慮表現である」との指摘があるが、迂言的二重否定表現にもそのような配慮的機能があると考えられる。本稿では、先行研究をふまえ、用語の定義、検証を行いながら、迂言的二重否定を用いた《主張》は配慮表現であるとの主張を行いたい。

2. 迂言的二重否定の定義

「迂言的」とは文字通り「まわりくどい言い方」の意味であるが、まわりくどい二重否定とは、形式的にもすぐに二重否定とわかる「～なくもない」や「～ないでもない」のような二重否定とは異なり、一見して二重否定とは分かりにくい「～といっても過言ではない」「～ないといったら嘘になる」のような表現を言う。この呼称は発表者の定義によるものである。以下で「～といっても過言ではない」のような表現がなぜ二重否定と言えるのか、次に説明する。

(1) このようにみてくると、言語学の知識がなければ日本語教育はできないといっても過言ではない。⁽¹⁾

→ [言語学の知識がなければ日本語教育はできない] は言い過ぎかもしれないが、(私は) そう思わない。

→ 言語学の知識がなければ日本語教育はできない。⇒話者の《主張》

(1) は、[] 内は話者の主張命題であるが、それは聴者の消極的フェイスを脅かすものであるため、《主張》を緩和するストラテジーとして、別の見解や立場も受け入れる（ように見せる）ために、一旦それは言い過ぎかもしれないとクッションを置く。が、再度「過言」を否定し、《主張》命題内容全体を肯定している。つまり、話者が《主張》命題を肯定するために、命題否定的意味を含む「～は過言（だ）。」を発話し、更にその後ろに「～ではない」が付加しているという二重否定の構造があると考えられる。

《主張》に現れる「～といっても過言ではない」は、一見すると明らかな二重否定とは分らない。しかし、話者の《主張》命題を肯定する為に用いられ、その意味は二重否定の用法となる。本稿では《主張》を婉曲的に緩和する迂言的二重否定表現と定義する。

3. 先行研究での扱い

2で上述したような「迂言的」二重否定表現は、日本語のコミュニケーションにおいて重要な役割を担っているにもかかわらず、それに関しての先行研究は、多くはない。森山（2002）は迂言的表現として、「～かもしれない」と「かねない」「あり得る」「可能性がある」等の話し手の命題に対する捉え方を比較し、迂言的な表現（「かねない」「あり得る」「可能性がある」等）を考察している。しかし、彭飛（2005）は、森山の分析は対人関係への配慮、話者の「和らげ」意図といった視点を欠いており、「話者の発話意図」、話者の本当の「心的態度」の解明という点において少し説得力に欠けると指摘している。

日本記述文法研究会（2003）では、「～ざるを得ない」「～ないわけにはいかない」「～ないではいけない」はその事態の実現が不可避なもの、必然的なものとして意味・用法を分析している。日本語記述文法研究会（2007）は、「～ないで{は/も}ない」「～ないわけで{は/も}ない」のような形において{も}にはぼかしの機能があり、意味用法が違うが、その違いは不明確と指摘するに留まっている。管見では、迂言的表現の先行研究、二重否定の先行研究と、それぞれの先行研究は存在しているが、それを話者がどのようなコンテキストの中で《主張》に用いて、聴者に配慮をしているのかは明らかにされていない。以下、日本語において、《主張》を伴ったコンテキストの中でたびたび出現する迂言的二重否定の用例を分析し、話者の《主張》が聴者にどのように伝えられているかを検証し、その表現のもつ巧みさによる配慮的視点を検証したい。

4. 《主張》の命題を二重否定で表現する意図

従来の先行研究に於いて、否定表現は肯定文を打ち消したい時や発話意図を緩和したい時に選択されるというものがある。Leech（1983）は、否定文は肯定文に比べ、その解釈に長いプロセスが必要で、処理のプロセスも複雑であるとした上で、話し手が否定文を好んで選択するには、その発話に婉曲的であいまい性を持たせる必要がある場合としている。これは、Grice（1989）の協調の原理でいうところの様態の原則に違反しているが、話者がそれでも否定文を用いるのには肯定文を打ち消したいという理由を挙げている。また、彭飛（2005）は、否定表現と緩和表現を考察し、「そんなことはできない」よりも「そ

のようなことは致しかねる」や「できかねます」のほうが柔らかく聞こえることを挙げ、否定表現をさらに緩和する表現が日本語にはあると指摘している。この二つの指摘は、《主張》において二重否定表現が発話される際の、発話意図を分析する際に重要な示唆を含んでいるように思う。以下に、「～といっても過言ではない」の例文を概観する。

(2) (サッカーの試合で、負けてしまった選手が次試合への意気込みを聞かれて)

アナウンサー：次の試合への意気込みを一言？

選手：これまでの成果は、この一戦（次の試合）のためだといっても過言ではありません。⁽²⁾

→これまでの成果は、この一戦（次の試合）のためだ。

(2)の話者の発話意図は明らかに肯定文で解釈できる。話者は様態の原則に反して二重否定文を使用している。Leech (1983) の指摘をもとに考察するなら、話者が発話意図を婉曲にする必要があると考える場合に否定文を選択することになるが、(2)の場合、話者は当然想定されている聴者の含み、すなわち「この試合に負けて、次の試合もまた…」を察知し、この否定的想定をやむなく譲歩して受け入れた上で、なお自身の《主張》を行いたいために二重否定を選択したとは考えられないだろうか。これに関連し、日本語記述文法研究会 (2003) には、二重否定の機能として「否定的な予想や想定を否定するとき、かといって完全に肯定するには自信がない場合や抵抗がある場合」によく用いられるとの指摘がある。話者は自身の《主張》命題内容が、他者の反感を買うかもしれないということに配慮し、《主張》を緩和している。このような《主張》の命題を二重否定する表現は、ある種のモダリティ形式の一種と考える。

迂言的二重否定表現は、主張命題を二重否定で表現することで、話者が聴者に対して配慮していることを示唆し、他者との反感を最小限にして、《主張》のおこがましさを少しでも緩和する効果があるモダリティ形式の一種である。

5. 《主張》における配慮表現機能

5.1. 「～といっても過言ではない」《主張》型の分類と用例数

採取した50の用例の内、グループEの4例以外は、話者の主張の結論帰結部に「～といっても過言ではない」が出現していた。用例を便宜的にA～Fの6つに分類し、図1に示した。各グループの詳細例は5.1.1以下で後述する。

図1 《主張》の型分類	用例数	%*
グループA 強調語彙架型《主張》	5	10
グループB 比況型《主張》	5	10
グループC 否定的・限定的命題内容型《主張》	4	8
グループD 限定条件提示型《主張》	4	8
グループE 現状断定型《主張》/命題提示断定型《主張》	25 (4*)	50
グループF モダリティ付加型《主張》	7	14
計 50例		

小数点以下は四捨五入した。 () は命題提示断定型《主張》の用例数を示す。

5.1.1. 「～といっても過言ではない」の《主張》パターン

[I]～[VII]は主な文形式を、グループA～Fは共起しやすい語彙、表現形式を分類したものである。

5.1.2. グループA 強調・限定語彙を伴う《主張》

「～といっても過言ではない」の前に、強調語彙（主には副詞）を伴う《主張》のタイプ。

[I]PはA（よりも）むしろ/一層/こそBといっても過言ではない。

(3) すなわち、女性の労働権は、基本的人権として本来固有の権利として備わっているものであり、福祉としてお上から与えられるものではないのであります。(中略) 本法案は男女差別を一層助長するものであると言っても過言ではないのであります。(『衆議』)

(4) コミュニケーションこそが、言語本来の機能であると考えたら、意義よりも効力こそが言語本来の意味と言っても過言ではない。(3)

[I]型に現れる強調・限定語彙はそれ自体が主張を強める働きのもので、それが付帯することで、主張命題内容を強調する効果がある。このような場合の《主張》結論帰結部分に「～と言っても過言ではない」を用いることで、一旦は強調された《主張》が緩和される。

5.1.3. グループB 比況型《主張》

「～といっても過言ではない」の前に具体的な例示、比較状況を用いて《主張》するタイプ。

(5) 二十万部も出版され、しかも五ヶ国語に翻訳された。当時のアメリカの人口の少なさ、読書階級の少なさを思えば、この二十万部という数は今で言うなら五百万部の大ベストセラーに匹敵すると言っても過言ではないだろう。(『自分』)

(6) (司会が出演者男性に) まさに園芸界の向井理と言っても過言ではない、さわやかな方ですね⁽⁴⁾

(5)、(6)の例文は、具体例を引き合いに出すことや、オーバーな表現で《主張》に説得力を持たせようとしているが、文末の「～と言っても過言ではない」の出現により聴者の解釈に幅をもたせ、聴者側の受け取り方が異なることに配慮している。

5.1.4. グループC 否定的・限定的命題内容型《主張》

「～といっても過言ではない」の前に、「～に過ぎない」や「ほとんど～ない」などの表現で、命題を(部分)否定したり、限定的語彙を用いているタイプ。

[II]Pは～に過ぎないと言っても過言ではない。

(7) 彼は、歌の世界に、人間孤独の観念を、新たに導き入れ、これを縦横に歌い切った人である。孤独は、西行の言わば生得の宝であって、出家も遁世も、これを護持する為に便利だった生活の様式にすぎなかったと言っても過言ではないと思う。(『西行』)

(7)の例は、「～に過ぎない」を用いた話者が否定的評価を下した主張命題内容の文である。しかし、「～といっても過言ではない」により、その否定的傾きが緩和されている。さらに文末にモダリティ「～と思う」が付くことにより、否定的評価の真偽を聴者に委ねる配慮をしている。文末のモダリティ付加型については、グループFで詳細に述べる。

[Ⅲ]Pはほとんど～ないと言っても過言ではない。

(8) 二千人をきる劇場では、どうしても入場料が高価になる。東京に、そんな条件を満たす劇場は極めて少ない。いや、ほとんどないと言っても過言ではない。(『宝塚』)

(8)の例は、話者の否定的主張命題内容は二度言い換えられている。主張命題内容には、確信に近いものを感じている話者が、文末に「～と言っても過言ではない」を使用することで、《主張》を緩和している。

[Ⅳ]Pは～ばかり/のみ(だ)と言っても過言ではない。

(9) ワードを使って作る文書のいくつかは、お決まりの文書です。日付や名前、宛先などを差し替えるだけですむものも多くあります。仕事で使っているなら、そればかりだと言っても過言ではないでしょう。(『ワード』)

[Ⅳ]のような副助詞は、「～ばかり」のほかにも、「～のみ」「～そのもの」なども使用例があった。(9)の例では、「～ばかり」を使用することで、一旦限定された主張命題内容を、文末の「～と言っても過言ではない」が緩和している。

5.1.5. グループD条件提示型《主張》

「～ないと言っても過言ではない」の前に限定的な条件節を提示し、それ以外の《主張》を排除しているタイプ。

[Ⅴ]Pは～なければ/～なくしては、～ないと言っても過言ではない。

(10) 常備化の進んだ今日においても、消防団の活躍なくしては消防行政の十分な遂行は考えられないと言っても過言ではない。(『消防』)

(10)は前出の必須条件が整わなければ実現可能にならない限定的な条件を提示して《主張》しているため、聴者の解釈は限定されてしまう恐れがあるのを話者が聴者に配慮して、「～と言っても過言ではない」を使用している。そのことにより限定的《主張》を緩和している。

5.1.6. グループE現状断定型《主張》/命題提示断定型《主張》

採取例の中で、50例中25例、全体の50%を占めた最も多く出現した型である。話者の《主張》は現状を断定した強いものである。そのパターンは主として次の2つに分けられる。

5.1.6.(a) 現状断定型《主張》

(11)「のです」は、日本語の表現法、日本人の思考法を奥深いところで支配しており、「のです」の問題は日本語の文法全体の問題であると言っても過言ではない。(『現代』)

(11)では、話者は現状に断定的判断を下し、《主張》している。文末に「～と言っても過言ではない」を付加することで、話者自身の《主張》を聴者がそうではないと思う可能性を否定しないように《主張》を緩和している。

5.1.6.(b) 命題提示断定型《主張》

(b)は同じ現状断定型であるが、(a)が話者の結論帰結部に「～と言っても過言ではない」が現れるのに対し、(b)はコンテキストの命題提示部分に「～と言っても過言ではない」が現れる。その後にく説明く反論」といった発話役割が付加される。今回採取の用例は、25

例中 4 例と少なかった。

[VI]P といえば～、と言っても過言ではない。

(12) 20 世紀半ばまで、言語哲学といえば論理学を指していたと言っても過言ではなかった。つまり、数学の基礎となるような論理の構造を、形式言語（記号）を用いて構築するものである。（『コミュニ』）

[VII]P は～（ということ）だと言っても過言ではない。＜説明＞これを説明すると/そこで、＜反論＞しかし/では、なぜ…

(13) エレクトロニクス産業は三端子デバイスによって誕生したと言っても過言ではない。これを分かりやすく説明すると、まず二端子デバイス、二つの電極に電圧をかけると…（『復活』）

このような場合、話者の主張内容は明瞭で、聴者にその内容は伝達されやすいというプラス面があるが、命題内容はあくまで客観的《報告》であり、私的なものではないことが強調される。そこに「～と言っても過言ではない」が付加されることで、これは話者の《主張》ですというマーキングの役割を果たし、その私的《主張》に配慮していると考えられる。

5.1.7. グループ F モダリティ付加型《主張》

「～と言っても過言ではない」のあとに、「だろう（でしょう）」「と思います」「かもしれません」を付加した用例が 50 例中 7 例あった。これらは、グループ E の現状断定型《主張》に属している形をとりながら、文末にモダリティを伴う用例として、グループ E とは区別した。

(14) もし、コミュニケーションが発達していなければ、このような東欧改革は行われなかったでしょう。発達したコミュニケーションが、このような東欧改革を生んだと言っても過言ではないと思います（『宇宙』）

山岡（2011）は、《主張》という発話機能の語用論的条件が、当該命題が参与の立場によって異なるものであることをあげ、《主張》に「と思う」を用いた場合は、命題内容はもともと私的なものであって、命題の真偽は客観的に検証不可能であるから「と思う」を付加してもしなくても意味はほとんど変わらないと指摘している。(14) は対談の中での話者の主観的《主張》であり、その主張命題内容は「～と言っても過言ではない」によって既に緩和されているので、「と思う」を付加しなくても山岡の指摘するように発話意図はほとんど変わらないが、対談という場面において、より丁寧さを添えて主張を締めくくる為に適切な文法形式として「と思う」が選択されていると考える。

(15) (子供のいない人生の選択はありかとの質問に) 以前、子供はいらないと言う彼と付き合っていました。そのことが原因で結婚をあきらめたと言っても過言ではないかもしれません。（「子供」）

モダリティとしての「かもしれない」の先行研究の中で、森山（2002）は「話し手の捉え方、あるいは思い方の表示」とし、小野ほか（2009）では、「かもしれない」で意味しようとしていることを高次表意で捉えている。(15) の例をあげ、ここで潜在化している「かもしれない」の高次表意は「主張」であるとし、その解釈は受け手（読み手・聞き手）の

理解に委ねられると説明している。

(16) きょう第 69 代横綱、白鵬が誕生し、モンゴル人両横綱の時代が幕を開ける。相撲にとって大事なのは、力士の出身国がどこかではなく、守るべき品格や文化がきちんと受け継がれて行くことだ。新横綱にもまだ偉大な父から学ぶべきことが残っているかもしれない。(『余録』)

(16) の例では、横綱の父から「学ぶべきだ」との解釈が可能である。このように (15) を考えると「私が結婚をあきらめたのは、子供はいらないという彼が原因だ」という解釈を「かもしれない」を付加する事で、話者は聴者にその解釈を委ねていると言える。

(17) 金に任せて食糧を買い漁る「資本の原理」と食糧を手放さなければ生きて行けない「世界の貧困」の上に日本の食体系が作られていると言っても過言ではないでしょう。このような食体系は、明日崩壊しても何の不思議もありません。(『市民』)

牧原 (2011) は「だろう」の発話機能を「話者の方が聴者よりも、当該命題について情報をより多く持っていることを明示する談話上のマーカーとして機能する」と指摘しているが、(17) も専門家が聴者 (読み手を含む) に対して、自身の見解を《主張》しているという形式からすれば、この指摘が当てはまる。よって「だろう (でしょう)」を付加することで、より自然な談話形成がなされたと考える。「～と言っても過言ではない」は書き言葉的性質が強いといえるが、話し言葉の場合にモダリティの「だろう (でしょう)」「と思います」「かもしれません」を付加したとしても、それは対談や談話の形成状況において自然なものとして付加されており、「～と言っても過言ではない」としてまとめあげられた話者の《主張》そのものの意図を変えてしまうような働きではない。

「～ないと言っても過言ではない」を用いた話者の《主張》は、命題内容が強烈または否定的評価を伴うものであったり、強調、限定的、断定的、オーバーな表現形式を用いたものである。同時に話者が《主張》の中で聴者の消極的フェイスに配慮し、自己の《主張》を緩和する働きもある。

7. おわりに

以上、《主張》に現れる「～と言っても過言ではない」のような表現を《主張》における迂言的二重否定表現と定義し、明らかな形式的二重否定表現に準ずる二重否定表現として、その配慮的機能を考察した。話者の《主張》命題内容が強烈、または否定的評価を伴うものであったり、強調、限定的、断定的、オーバーな比喩的表現形式を用いたものである場合に、「～と言っても過言ではない」のような表現は、聴者の消極的フェイスに配慮して《主張》を緩和する婉曲的表現の機能を有している。今後、二重否定表現を用いて話者が聴者に配慮する緩和表現を中心に、その形式を整理しながら配慮表現としての分析を蓄積していく必要があると考える。

注

(1) の例文は、2011 年 11 月 25 日に学生が提出した「語用論」のレポートより抜粋した。

- (2)の例文は、NHK ニュースの中でサッカー選手が発言したものである。
 (4)の例文は、2011年11月2日に学生が提出した「語用論」のレポートより抜粋した。
 (6)の例文は、2010年6月のNHK「朝イチ」のMC女性の発言より引用した。

参考文献

- 大堀裕美(2010)「配慮表現としての「～気がしないでもない」のメカニズム—主張を中心に—」
 INTERNATIONAL JOURNAL OF PRAGMATICS, Vol.19 Pragmatics Association of Japan
 小野正樹(2005)『『と思う』のコミュニケーション機能』『日本語態度動詞文の情報構造』くろしお出版
 小野正樹・山岡政紀・牧原功(2009)「かもしれないの談話機能について」『漢日理論言語学研究』沈力・趙華敏編 学苑出版社
 鈴木夕佳(2011)「配慮の機能をもつ副詞についての一考察—「そこそこ」を中心に—」『日本語コミュニケーション 研究論集』第1号 日本語コミュニケーション研究会
 日本語記述文法研究会(2003)『現在日本語文法④モダリティ』日本語記述文法研究会編
 —————(2007)『現在日本語文法③肯定』日本語記述文法研究会編
 彭飛(2005)『日本語の配慮表現に関する研究』和泉書院
 牧原功(2011)「配慮表現としての文末のムード形式」『日本語コミュニケーション研究論集』第1号 日本語コミュニケーション研究会
 森山卓郎(2002)「可能性とその周辺—「かねない」「あり得る」「可能性がある」等の迂言的表現と「かもしれない」」『日本語学』第21巻第2号 明治書院
 山岡政紀・牧原功・小野正樹(2010)『コミュニケーションと配慮表現 日本語語用論入門』明治書院
 山岡政紀(2011)「『と思う』構文の発話機能に関する対照研究」『日本語コミュニケーション研究論集』第1号 日本語コミュニケーション研究会
 —————(2012)「配慮表現研究の地平～原理と研究テーマ群～」待遇コミュニケーション学会
 2012年春季大会招待講演資料
 Brown,P.&S.Levinson(1987) *Politeness: Some universals in language Usage*, Cambridge University Press.
 Leech,G.N.(1983) *Principles of Pragmatics*, Longman (邦訳:池上嘉彦・川上誓作(1987)『語用論』紀伊国屋書店)
 Grice,H.P.(1989) *Study in the way of words*, Harvard University Press.(邦訳:清塚邦彦(1998)『論理と会話』勁草書房)

用例出典(下線は本文中略称)

- 1 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(2009)国立国語研究所(編) BCCWJ モニター公開データ
 秋本芳伸・岡田泰子ほか(2000)『ワード 2000 使えるワザ 124』宝島社
 上田紳爾(2002)『宝塚百年の夢』文芸春秋
 大蔵省印刷局(1981)『消防白書』総務省消防庁総務課広報係
 大見忠弘(2004)『復活!日本の半導体産業』財界研究所

- 国会会議録(1984)「第101回国会衆議院本会議 遠藤和良氏の発言」
渡部昇一(2002)『自分を鍛える!』三笠書房
Yahoo 知恵袋(2005)「子供のいない人生の選択」への書き込みより
2「小松左京コーパス」
『宇宙時代の地球人類の調和 討論』
3「新潮文庫の100冊」CDROM版より
小林秀雄(2003)『西行』新潮社
4 田野村忠温(1990)『現代日本語の文法 I』和泉選書
5 毎日新聞(2007年5月30日)『余録』東京朝刊
6 村田幸作(2004)『市民のための遺伝子問題入門』岩波書店
7 山岡政紀・牧原功・小野正樹(2010)『コミュニケーションと配慮表現 日本語語用論入門』
明治書院

(大堀裕美、創価大学大学院博士後期課程在学、e09d1303@soka.ac.jp)